



【ほうれんそう（周年収穫）】

①栽培こよみ

作型	月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
露地	1		△	■									
	2			△	■								
	3				△	■							
	4					△	■						
	5						△	■					
ハウス	1	△	■										
	2		△	■									
	3			△	■								
	4					△	■						
	5							△	■				

△：播種 ■：収穫 —：本圃期間

②栽培のあらまし

(1) 施肥

前作の残渣はできるだけ取り除くか、畦深部に埋め込みます。基肥、完熟堆肥、石灰質資材を施用し畦を立てます。ほうれんそうは直根性であるのでできるだけ深く耕耘することが大切です。

追肥は本葉 2 枚の頃に 1 回目、本葉 4 枚の頃に 2 回目を条間に溝を切り施用します。

畦立ては排水の悪い圃場では高畦しないと根傷みを起こします。

肥料名	総量	(露地)						(ハウス)			
		基肥	追肥		成分量			基肥	成分量		
			①	②	N	P	K		N	P	K
完熟たい肥	1000	1000						1000			
化成肥料	200	40	80	80	24	16	14	100	12	8	7
有機質肥料	80	80	80		4		2	40	2		1
石灰質肥料	100	100						100			
合計					28	16	16		14	8	8

(2) 播種

畦の上面を管理機で整地した後、手押式の播種器で直播します。畦間 120cm の畦に 3 条播きします。

播種量は 9~12 万粒/10a 程度に調節します (ネーキッド種子)。

(3) 播種後の管理

播種後すぐに灌水チューブで灌水します。畦芯まで十分に湿るまで散水し、以後も乾燥したら灌水チューブ、スプリンクラー等で適宜灌水します。発芽促進、虫・鳥害防止のためべたがけを行います。べたがけ資材は目的に応じて、長繊維不織布、割繊維不織布、ネット類等を使い分けます。べたがけは台風などの災害対策にもなります。

本葉2枚程度になったらべたがけを除去し、中耕・追肥、必要に応じて間引きします。低温期の生育促進を目的に、最終追肥のあとべたがけを行うと良いでしょう。

収穫5~10日前に水を切り、日持ちの良いほうれんそうに仕上げます。

③害虫防除

病害は、苗立枯病、萎凋病、べと病、ウイルス病などが発生します。薬剤の予防的な散布の他、連作回避、抵抗・耐病性品種の活用、完熟堆肥の使用、アブラムシ類の防除等の対策を行います。

害虫はヨトウムシ類、ハモグリバエ類、コナダニ類、タネバエ、アザミウマ類等が発生します。コナダニ類、タネバエ、アザミウマ類の対策は被害が出てからでは遅いので予防します。

適切な薬剤防除の他、防虫ネットの活用、完熟堆肥の使用等対策を行い、農薬だけに頼らない防除に努めます。

④栽培上の留意点

- ・春まきの抽台、高温期の萎凋病、春秋期のべと病、高温期の低収、低温期の生育不良等の問題は品種である程度解決できるので品種の選択に注意します。

出典：「農業新技術百科」（2009年 兵庫県）

